

コリントにある神の教会

使徒パウロの三回にわたる大伝道旅行によってローマ帝国の各地にキリストの教会がつくられていった。帝国内の大都会の一つであったギリシャのコリントに生まれた教会は、初代教会の中でもっとも賜物(たまもの)に恵まれた群れであったが、しかし同時に、もっともトラブルが多く、使徒パウロを悩ませた教会のひとつであった。

分派活動による教会内の不一致があり(1～4章)、道徳的な乱れ(5～6章)、周囲の異教世界との関係、特に偶像礼拝との関わりで起こって来るさまざまな問題に対する意見の対立(8～10章)、聖霊の賜物の一つである異言の極端な主張による公的礼拝の混乱(12～14章)および復活を否定するグループによる教理上の問題等があり(15章)、一体これでも神の教会かと疑いたくなるような問題多き教会であった。

それにも関わらず、彼らに宛てて書いた手紙の冒頭の挨拶で、使徒パウロは彼らを一刀両断に断罪することなく、彼らのことを「聖なる者たち」と呼び、また彼らを「コリントにある神の教会」とやさしく呼びかけていることに私たちには大きな驚きを感じる(1:1～2)。これはパウロがコリント人のご機嫌を取ろうとするような単なる挨拶上のお世辞ではない。私たちはここに使徒パウロの深い福音理解と教会観の奥深さを見るのである。

この地上には完全な教会はない。完全なキリスト者がいないように完全な教会もひとつもないのである。私たちはみな、弱さを持ち、欠けを持っている。個人としても教会としてもそうである。私たちが「聖なる者たち」と呼ばれるのは、私たちがそれにふさわしいことをしているからでも、聖人のように完璧であるからでもない。

私たちはみな破れを持つ存在であり、罪を犯し、人を悲しませ、傷つけ、人をつまずかせるような存在である。しかし、それにも関わらずこの私たちのために、救い主キリストがあがらないの血を流してくださったという、この事実のゆえに、神はこの私たちを受け入れて下さっている。このキリストにある救いの恵みのゆえに、私たちはなおもキリスト者であり続けることが許されているということ、ここに私たちに与えられた神の恵みの深さがある。

それと同様に、教会もそうであると使徒パウロは教える。教会が「神の教会」と呼ばれるのは、教会が何の問題もなく過ちもない、完全無欠な存在だからではない。教会にも弱さがあり罪がある。時には過ちを犯し、教会としてふさわしくない状態に陥ることもある。しかしそれにも関わらず、たとい罪の弱さの中にある教会であったとしても、神は、イエス・キリストのあがらないのゆえに、これを「わたしの教会」と呼び、これを受け入れ、これを愛してくださるのである。ここに私たちキリスト者の慰めがあり、また地上の教会の慰めがある。

私たちは皆神の恵みによって生かされているのである。それ故に私たちは主にある兄弟姉妹たちをいたずらにさばいてはならず、私たちと同じように「神の聖徒たち」として受け入れ尊敬し、また、自分の属する教会を、たとえ不完全であっても、非寛容な心と態度で批判することなく、むしろ「神の教会」としての自覚を持ち、共に弱さを担いつつ、愛し、大切にしていくことを学ばねばならないのである。私たちがキリスト者であり、私たちの群が教会であるのはただただキリストにおける神の恵みの故なのである。